

「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」論：大正 七年からみる「ばけもの世界」とは

頼, 怡真
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/19885>

出版情報：九大日文. 16, pp.2-14, 2010-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「ペンネンネンネンネン・ネムの伝記」論——大正七年からみる「ばけもの世界」とは——

LAI Yichen
賴 怡真

一、問題設定——ナンセンス物語の「ネムの伝記」

宮澤賢治の生前に発表された数少ない作品には、昭和七年三月に「児童文学」の第二冊に掲載された「グスコープドリの伝記」（以下「ブドリの伝記」と略記）がある。幼い頃、飢饉によって両親を失い、妹とも離れ離れになったブドリが立派に成長し、衆人の幸福のために自己犠牲にたどり着くまでの道程を描いた作品であるが、この話の先駆をなすのが大正十一年前後に書かれた「ペンネンネンネン・ネムの伝記」（以下「ネムの伝記」と略記）である。飢饉の為に一家離散になった冒頭の設定は「ブドリの伝記」とほぼ同じであるが、「ブドリの伝記」の主人公、グスコープドリ（以下「ブドリ」と略記）が人間であるのとは異なり、「ネムの伝記」の主人公、ペンネンネンネン・ネム（以下「ネム」と略記）は「なめくぢばけものやうな柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをはい」たばけもので、棲む世界も人間の世界ではなく、「ばけもの世界」という設定

である。成人後、「世界裁判長」になったネムはすぐさま名声や地位を手に入れ、強大な権力を得るが、「どうしたはずみか、足が少し悪い方へそれ」、「ばけもの世界」ではタブーとされる「出現罪」を犯し、職を奪われる。この「ネムの伝記」の他に、「ブドリの伝記」に関連すると考えられるものとして、両作の間の時期に「ペンネンノルデ」という人物を主人公とする簡条書きの改作メモや、第一章しかない「ネムの伝記」、「ブドリの伝記」とほぼ同じ内容の「グスコブドリの伝記」（以下「グスコンの伝記」と略記）など、「伝記群」と括られる数々の改作が存在する。そして、この「伝記群」のうち、最初に書かれた「ネムの伝記」は作品のテーマ性⁽¹⁾や話の内容が他の改作とかけ離れているため、「伝記群」とは全く違う独立する作品として捉えるべきであると指摘されている⁽²⁾。

また、創作時期についても大正十一年前後に創作された「ネムの伝記」は宮澤賢治の創作活動の中で比較的早期の作品と言える⁽³⁾。特に「伝記群」に限っても、「ネムの伝記」の成立時期は極めて早く、そのため、ただの習作だと見なされる傾向がある。古谷綱武は「ひとり合点にきわだっている才能の遊び」と見て、「ネムの伝記」を作品として未熟であるとし⁽⁴⁾。黒井千次は「ネムの伝記」の舞台となる「ばけもの国」の荒唐無稽さから「奔放な想像力によって思いきりふくらみあがってしまった」と酷評している⁽⁵⁾。また「ナンセンスな言葉遊び」⁽⁶⁾や「ナンセンスストーリー系のばけもの世界ヴァージョン」⁽⁷⁾など、作品のナンセンス的な部分への批評が目立ち、「ネムの

伝記」は賢治の過渡期の作品に過ぎず、未熟な作品と位置づけられてきた。しかし、「伝記群」の変遷が一人の人間、宮澤賢治の晩年にいたるまでの心境の変化に呼応したものであるならば、その原点とも言うべき「ネネムの伝記」の成立の背景には、作家の人生が深く関わっていると考えられる。賢治の創作活動の発端は大正七年に見られるが⁴³、日記の代わりのように、頻繁に家族や友人に寄せた書簡からその時期の賢治の関心がほぼ二つの事件に集中していたことがわかる。それは大正七年の関教授⁴⁴の土性調査への関与と親友保坂嘉内の退学事件である。賢治の生活に大きく関わったこの二つの事件は創作活動に大きな影響を与えており、それは「ネネムの伝記」の成立にも及んでいるものと考えられる。本稿では、この事件が「ネネムの伝記」に如何に反映されているのかを検証し、それを通じてナンセンス的で、未熟な作品とみなされる「ネネムの伝記」のイメージをより明確化することを目的とする。

二、大正七年という年

生前の宮澤賢治が童話作家という地位や名声を確立しえたとは言いがたい。賢治は農林学校卒業後、農学校の教諭を経た後、自給自足の生活を送りたいがために羅須地人協会を創立した。農民達により良い生活をさせるために尽力し、当時普及していない石灰肥料の販売や推奨のために各地を奔走している。また生前最後の仕事となったのは東北碎石工場の販売員であった。

そのユニークな経歴は、どちらかというと、作家としてよりも農業改良者のイメージが鮮明である。このような経歴を持つ賢治が童話創作と接点をもつのは、いつからであろうか。その原点は、大正七年に家族の前で自作童話の「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」を朗読し、また同年の夏に「貝の火」を朗読したことから始まったとされている（短歌や散文の発表はもっと早くからあるものの、童話の発表はこの年が最初である）。大正七年という年はまた賢治にとつて農林学校の卒業を迎える年でもあった。卒業を目前に控える賢治は徴兵検査のこともあり、将来の進路について研究生として学校に残ることを父親に相談している。

（前略）それは未だ確定無之事に候へども稗貫郡にて今春より三カ年の予定に土性の調査を致すとの事にて此を学校に依頼し来るべきとの事に御座候。『校本』第十三巻、「書簡

43 大正七年二月一日

この土性調査の成果は後に賢治の卒業論文を指導した関教授によつて「巖手県稗貫地質及土性調査報告書」（稗貫郡役所発行、大正十一年九月十五日）にまとめられた。結局賢治は卒業すると同時に研究生としてそのまま学校に在籍したが、土性調査の仕事に早くに挫折し、半年ほどでやめてしまった。そして卒業を目前に賢治にもう一つ大きな事件が起こる。それは賢治の親友、保坂嘉内の学籍除名処分である。保坂が除籍された理由として、賢治も投稿していた同人誌「アザリア」⁴⁵第五号に掲載した「社会と自分」の虚無思想が問題になったと推測されている。

関教授の仕事を手伝うことから始まった土性調査は、一見賢

治の創作活動とは関係ないように見える。しかし原子朗の整理によれば、歌「三三四く三三三」は土性調査中に作られ、短編「沼森」「泉ある家」「十六日」は江刺郡の、短編「家長制度」は丹藤川方面の土性調査中の体験をもとにした作品である¹¹⁾。また、童話「或る農学生の日記」には「今日は三年生は土質と土性の実習だった」という描写がある。このように、この土性調査の影響が賢治の創作活動に様々な形で見られるが、「ネネムの伝記」との関連については未だ言及がない。よつて本稿ではテキストを分析し、その関連性を検証したい。

三、ばけもの世界の原型とは

前述のように、「ネネムの伝記」がナンセンス的に解説されてきた原因として、「無造作に過ぎ、無限定的に過ぎない」¹²⁾「ばけもの世界」の設定の問題がある。押野武志は「ばけもの世界」が陸地の人間の世界とは隔絶した未分化、不定形な世界として描かれていることに着目し、またネネムが空へ網を投げて昆布を取る場面では、「網には『風の中のふかやさめがつきあいた』ることもある」とあることと、ネネムの歩行スピードが「ノット」という船舶や海流などの速さの単位で示されていることから、「ネネムの棲むばけもの世界は、海の世界を彷彿させる」と指摘している¹³⁾。押野の指摘した箇所のほかにも、「ばけもの世界」が海の世界ではないかと思わせる場面はいくつもある。たとえばネネムがばけもの大学校を出て大博士に渡された名刺

を指差しながら「通りかかったくらげのやうなばけもの」に路を尋ねる場面や、また、奇術大一座の魔術が上演される最中に「見物はもうみんなきちがひ罫のやうな声で『ケテン！ケテン！』とどな」るなど、複数の場面で水中動物の名前が使われている。このように「ばけもの世界」は確かに「海の世界を彷彿させる」世界と言えるが、一方でそれにとどまらない点が存在する。まず、押野の指摘した昆布取りの場面であるが、ネネムがどのようにして昆布を取ったかに注目したい。両親と妹を次々と失い、シヨックと疲労のあまり昏睡したネネムが再度目を醒ました時に、目の前にばけもの紳士がいた。食べ物があるなら昆布取りの仕事を手伝うようにと紳士に言われ、ネネムは仕方なくその要求を飲み込んだ。「おじさん。そんなら僕手伝ふよ。けれどもどうして昆布を取るの」とネネムが聞き、次のように会話が続く。

「ふん。そいつは勿論教えてやる。いゝか、そら。」紳士はポケットから小さく畳んだ洋傘の骨のやうなものを出しました。(中略)

「いゝかい。こいつをね。あの栗の木に掛けるんだよ。あゝ云ふ工合にね。」

紳士はさっきの二人の男を指さしました。二人は相かわらず見えない網や糸をまっさおな空に投げたり引いたりしてゐます。

紳士ははしごを栗の樹にかけました。

「いゝかい。今度はおまえがこいつをのぼって行くんだよ。」

そら、登ってごらん。」

ネネムは仕方なくはしごとりついて登って行きましがはしこの段々がまるで針金のやうに細くて手や、足に喰ひ込んでちぎれてしまさうでした。

「もつと登るんだよ。もつと。そら、もつと。」下では紳士が叫んでゐます。ネネムはすっかり頂上まで登りました。栗の木の頂上というものはどうも実に寒いのでした。それに気がついて見ると自分の手からまるで蜘蛛の糸でこしらえたやうなあやしい網がぐらぐらゆれながらずつと青空の方へひろがってゐるのです。そのぐらぐらはだんだん烈しくなつてネネムは危なく下に落ちさうにさへなりました。『校本』第七卷)

右の場面から、ネネムが昆布を取るために「栗の木」に登り、「空」に向かつて昆布を取るという動作を確認できる。そして「栗の木の頂上」は寒く、ネネムは網の揺れに揺らされている。これらは「海を彷彿させる」世界というよりも、ネネムの上空に空ではなく海がある世界、つまり、「空と海が逆になつてゐる」世界を示しているとするほうが適切であろう。普通海で取るはずの昆布は「ばけもの世界」では「栗の木」に登つて空で取るものとされているように、我々が思つてゐる世界のあるべき姿がここにおいては逆になつてゐる。このように、「空と海が逆になつてゐる」世界として、「ばけもの世界」を考える上で、注目すべき箇所がある。それは「ばけもの世界」の原点について触れた「この世界がまたなめくじでできてゐたころの遺

風」というくだりである。

つまり、ネネムのいる「ばけもの世界」は、空に昆布やさめ、ふか、くらげが存在し、さらに最初「なめくじでできてゐた」とされる世界である。そもそも主人公のネネムの造型にも「なめくじ」の面影が残つてゐる。ネネムはヘンムンムンムンムン・ムムネ市に向かう途中、ある百姓のおかみさんばけものに自分の行方不明となつた息子に間違えられる。そのおかみさんは泣きながらこう訴える。

「まあ、さうでしたか。うちのせがれも丁度あなたと同じ年ころでした。まあ、お髪の毛のぢれ工合から、お耳のキラキラする工合、何から何までそっくりです。それにまあ、なめくぢなめくぢばけものやうな柔らかなおあしに、硬いはが

ねのわらじをはいて、なにが御志願でいらしやるのやら。お、うちのせがれもこんなわらじでどこを今ごろ、ポオ、

ポオ、ポオ、ポオ。」⁽¹⁴⁾『校本』第七卷)

ばけもの世界の住民には、前述したような水中動物のばけものもいれば、「たうがらしや、白や、鉢や、赤や白や、実にさまざまの学生のばけもの」もいる。また瑪瑙木の「世界長」や「ザシキワラシ」の被疑者など、ばけもの住人のキャラクターは非常に多様であり、一括りには捉えることができない。その中で主人公のネネムは「なめくぢばけもの」のようである。しかし「なめくぢばけものやうな柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをは」く造型はどちらかというところ、「蝸牛」のイメージに近いと言える。

また、森でネネムを昆布取りとして雇った紳士ばけもの造型も見てみよう。「貝殻でこしらへた外套を着て水煙草を片手に持つてゐる」と表現されるその姿は固い殻を背負っている蝸牛のイメージそのものである。賢治の童話のうち、「なめくじ」がでている作品としては、「蜘蛛となめくじと狸」(大正七年八月、賢治がはじめて家族の前で朗読した童話)がある。この作品では「銀色のなめくじの立派なおうちへかたつむりがやつて参りました」「もつとおあがりなさい。あなたと私とは云わば兄弟」とあることから、この作品では「なめくじ」と「かたつむり」を分けて書いていることがわかる。ちなみに、なめくじのほかに、「ナメクジウオ」(蛞蝓魚)という、人類も含めた脊椎動物の最も原始的な祖先に近い動物⁽⁵⁾もいるが、その外見はやはり魚に近く「やわらかいおあしに、硬いはがねのわらじ」の、いわゆる「蝸牛」のイメージではない。

有名な柳田国男の「蝸牛考」では、「蝸牛(カタツムリ)の方言が東北と九州が一致してナメクジ系⁽⁶⁾であると指摘している。「蝸牛は日本の島に、日本人よりも前から住んで居た。其の最初の遭遇の際から、既に何か知らず名があつた」⁽⁶⁾。また柳田は蝸牛は遠い昔から日本人にとって親しみ深い動物であると説き、同じ「蝸牛」でも日本各地によって言い方が違うと指摘している。

九州では肥後の人吉付の村などは、蛞蝓のことをハダカナメクジと呼んで居る。さうして只なめくじといへば蝸牛を意味して居る。(中略)津軽の弘前付近でも両方ども、ナ

メグヅ若くはナメグヅリである(中略)即ち此二種の虫を同類と看做して、単に家の有無によつて差別を立てんとしたのである。

つまり、東北で「蝸牛」を「なめくじ」と言う事例が存在することがわかる。前述したように、「ネネムの伝記」では、ネネムは「なめくじばけもの」であるが、「柔らかなおあし」に「硬いはがねのわらじ」をはくという外見のイメージは「なめくじ」というより「蝸牛」に近い。また同じ「蝸牛」のイメージをしている貝殻の外套を着るばけもの紳士の描写や、「なめくじできてゐた」「ばけもの世界」の描写など、「ネネムの伝記」では、「なめくじ」というのは、東北でも通用する「蝸牛」のことを言っているのではないか。

以上のように、「ばけもの世界」について考察してきたが、さらに、水中動物や「なめくじできてゐた」設定の発想がどこからきたのかを考えるために、創作活動の発端と見られる大正七年に遡つてみたい。「書簡43」のように、賢治は関教授の土性調査の仕事を手伝うために研究生として学校に残つた。もともと三年間を予定していた就労期間も結局半年でやめてしまった。その後、大正十一年に関教授は調査の結果をまとめた「巖手県稗貫地質及土性調査報告書」を発表し、その序文から賢治が担当した部分は、第一章の「地形及地質」、また付図「岩手県稗貫郡主要部地質及土性略図」であることがわかる⁽⁷⁾。賢治の関与した第一章「地形及地質」の第二節の第一項「岩石ノ大別」には以下の叙述がある。

無生代ノ地層ハ恐ラクハ少クトモ原始地殻ノ一部ヲ代表シ、古生代ハ軟体類甲殻乃至魚類ノ時代ニシテ其下半ニ於テハ羊齒類石松類等カ喬木トナリテ隆盛ヲ極メ其終リニ望ミテ漸ク原始的松柏科ヲ出スニ至レリ、中生代ハ爬虫類及ビ両棲類ノ時代ニシテ巨大ニシテ奇怪ナル形態ヲ具ヘタルモノ多カリキ其終リニ至リテ原始的ノ鳥類ヲ生シ又漸ク現代ノ「カンガル」ニ似タル有袋哺乳獸類ヲ出セリ（後略）

（傍点ルビは原文のまま）

まず、注目したいのは「古生代ハ軟体類甲殻乃至魚類ノ時代」という記述である。前述したように、童話「蜘蛛となめくぢと狸」では、「なめくぢ」と「蝸牛」はわけて描写されたが、「ネムの伝記」では、「やわらかいおあし」と「硬いはがねのわらじ」というネムの造型は柳田の指摘に従えば「蝸牛」のことを意味するものと考えられる。そして「蝸牛」はまさに「軟体類甲殻」の一種である。その上に、「ネムの伝記」で登場する「ふか」や「さめ」「くじら」といった魚類の造型による「ばけもの」の設定から、「ばけもの世界」は先ほど引用した「古生代ハ軟体類甲殻乃至魚類ノ時代」という一文と一致しているのがわかる。原子朗は「昆布に限らないが、海に遠い環境で育った賢治には、潜在的に海浜ないし海底憧憬の感情があつて、それが北上川に古世代の海を思い「イギリス海岸」と命名するほどの賢治の海底憧憬、そして古生代への興味を指摘している⁹⁸。地質時代についての言及はこれだけではない。「ネムの伝記」で描かれる、借金の連鎖で起こったフクジロ事件では、

「タンイチ」というばけものが登場するが、「黒い硬いばけもの」という描写に原は「炭の字がびつたりの「タン」という命名であることから、賢治得意のユーモラスな「石炭のばけもの」のつもりであつたにちがいない。石炭は古生代の石炭紀に繁茂した化石シダ植物（鱗木）などが地殻中に埋没、炭化した物質」と指摘している⁹⁹。そのほか、「ばけもの世界」の「世界長」は「身のたけ百九十尺もある中世代の瑪瑙木」⁽²⁰⁾である。また「ばけもの世界」は大学校が「教室の広いことはまるで野原です」や、「向うには大きな崖のくらゐある黒板がつるしてあつて、せの高さ百尺あまりのさつきの先生のばけものが講義をやつて居りました」という描写があり、また、「世界警察長」の持っている「新聞のくらゐある名刺」など、ものの巨大さが強調されている。「中生代ハ爬虫類及ビ両棲類ノ時代ニシテ巨大ニシテ奇怪ナル形態ヲ具ヘタルモノ多カリキ」とあるように、中生代の特徴でもある「巨大さ」は「ばけもの世界」の特徴とも言える。このように、「ばけもの世界」の描写に地質時代を連想させる箇所が随所にあることが指摘できよう。このような描写が可能であつたのも土性調査の仕事に携つた賢治の岩手の地形や地質に対する専門的な見識や知識が背景にあつたからである。また、地質時代に対する言及は「銀河鉄道の夜」の一節を想起させる。カムパネルラとジョバンニは列車の初めての停車時間に、ある崖の白い岩に動物の骨を掘つている学者らに遭遇する。

くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざつと百二十万年

ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十
万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝
がらも出る。『校本』第十巻)

昔海岸であつたはずの場所は今崖になつてゐる。そして学者
らはそこで牛の祖先にあたる動物の遺骸を掘り「証明するに要
るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十
万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、
ぼくらとちがつたやつからみてもやつぱりこんな地層に見える
かどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしない
かということなのだ」と述べている。ネネムのいる「ばけもの
世界」には空で昆布を取つたり、空でさめやふかにぶつかられ、
烈しく揺られ、また周りには水中動物のばけものがいたりする。
「ばけもの世界」の原点となる世界は「なめくじでできてゐた」
といった描写も、どれも「ばけもの世界」の海だつたところの
遺跡を示し、また空や風、陸、そして海の境界性の曖昧さを持
つ大昔の世界を描こうとしているように思われる。賢治が同人
誌「アザリア」第一号に投稿した「旅人のはなし」から」に
は、「ある時、その旅人は一人の道づれと歩いて、みました、
よく晴れた日で、二人の瞳の中には空や、山や、木や、道やが
奇麗に、さかさまに、写つてゐました」とあり、ここでも世界
が逆さまに映つてゐるという趣旨の内容が指摘できる。また賢
治が保坂に送つた一枚の葉書（書簡39、大正六年九月二日）には
葉書の天地を逆にしてあるものがある。その葉書には、山と馬
と林の手書き絵が描かれており、山の中腹には「蛇紋岩ノ露出」

という文字が記され、下には「mountain debris.」と英語の
説明文がある。また山の上空に無数の点々が描かれ、そこにも
「dispersed system (medium—air substance H20)」という英語の
説明文が記されている。この葉書は誤つて天地を逆さまにした
のか、それとも賢治の故意によるものかわからないが、逆さま
になる世界観は賢治の創作や書簡などに度々現れることは確か
である。しかもその背景には賢治の勝手気ままな空想によるも
のではなく、地質研究に関する正確な知識から生まれたものだ
と見えよう。

四、ネネムの失敗

精密さが必要とされる化学研究に心酔している賢治であるが
故に、創作活動において、生真面目な性格の痕跡が随所に見ら
れる。それは賢治の創作スタイルの特徴とも言えるが、数回に
わたる改作によつて、一つの作品をどんどん発展させるといふ
ケースである。前述したように「ネネムの伝記」の後も改作と
見られる大量の原稿が残された³³⁾。まず、「ネネムの伝記」では、
ネネムは一度出世したにもかかわらず、最後は不意の失脚とい
ふ結末を迎える。そして、この作品に続く「作品群」は全て火
山局の仕事と爆弾を誘爆させる場面が描かれている。つまり「ネ
ネムの伝記」以降の改作はどれも「自己犠牲」というテーマと
なつてゐる。「ネネムの伝記」のテーマ性については前述した
ように、天沢が同じ早期作品の「貝の火」にも見える「慢心」

であると指摘している。これに比べ、「ネネムの伝記」以降の作品に見える「自己犠牲」の結末はどちらかというと、「英雄譚」としてありがちなパターン、つまり英雄像が自己犠牲という死の方によって作り上げられるものである。「英雄譚」のパターンとして三浦佑之は「幼少時の秘められたエネルギー」や「共同体からの追放（外への発展・冒険）」「智慧の働き」「嫁・婿の保障」などの共通点を挙げた⁸⁴。一連の困難を乗り越えて最後はめでたくお姫様と結ばれるハッピーエンドが多い英雄譚が定着するが、賢治の一連の「伝記群」のうち、一作だけが女性の存在について描かれている。それは「ペンネンノルゲ」という人物を主人公とする一枚の簡条書きのメモには、「項目九」と「項目十二」に「恋人アルネ」についての言及が見られる。また「伝記群」の中で、最も鮮明に英雄として造形される主人公は「グスコンの伝記」のグスコンブドリ（以下「グスコン」と略記）であろう。グスコンが自らの死を決意し、爆弾を誘爆させる仕事に出かける直前の場面を見てみよう。

玄関が大へんさわがしいので出て見ますとそれはいつかのブドリを胴上げにした連中でした。ブドリが出て行くときみな涙を流して云ひました（『校本』第十巻）。

そのほかに、グスコンの死後に「みんなはブドリのために喪章をつけた旗を軒ごとに立てました」という描写がある。この二つの場面は次の改作「ブドリの伝記」で削除されることによって、主人公の英雄像としてのニュアンスは大分薄められたものの、基本的には「ネネムの伝記」以降の改作はどれも「自己

犠牲」がメインテーマとなっていることは変わらない。以上のように、「ペンネンノルゲ」を主人公とするメモで、主人公と恋人が結ばれる描写や「グスコンの伝記」の英雄譚的な語り方が見られる一方、「ネネムの伝記」の主人公だけが「その時どうしたはづみか、足が少し悪い方へそれました」「しかしどうとう僕は出現してしまった」「あゝ僕は辞職しよう。それからあしたから百日、ばけもの大学の掃除をしよう。ああ、何もかにもおしまひだ」という失脚（失敗）の結末で物語が終わっている。「ネネムの伝記」の失敗は何故描かれたのか。

五、賢治の身边にまつわる土性調査と保坂嘉内の失敗

童話の創作活動を始めた年に、賢治は土性調査に参加した。この仕事は最初、「書簡43」に書かれたように、三年間従事するはずであったが、賢治は同年の八月にやめてしまった。この仕事をやめてしまった経緯について当時賢治が父親や保坂に送った書簡の中にも記されている。父親、宮澤政次郎宛書簡では土性調査の仕事に対し、悲観的な意見を述べている。

又今週より土壌分析に関先生の実験室に入り居り候処從來の化学分析法とは全く別種にして且つ種々の規則も全く異り屢々叱正を蒙り候（中略）且つ先生は私は本統は分析等には余り適せず一人にて本を読み考へて居る事最適なる由を申され候（中略）実験指導補助なる辞令を八月限り辞退する事（中略）甚だ自分勝手なる様に御座候へども実は

土壤の化学分析なるものは形式的のものにて大したる効果無之ものなる為私には全く無駄な仕事の様に思はれ候次第に御座候（後略）。〔校本〕第十三卷、「書簡71」大正七年六月二十日

この書簡を読んだ父は、賢治の仕事に対してすぐあきらめてしまふ性質を叱つたようである。賢治は次の書簡で再三、土性調査が自分の性に合わないことを強調している。

只今の分析とても、本日等は夕の七時に実験室を出で候へども、何も仕事が苦しとは存じ申さず候。只無意味なる事を致して心神を勞らす事を絶え難く思ひたるのみに御座候へども（中略）実は私の今迄勉強したる処にては最、地に關係ある則ち岩石、鉱物等を取扱ひたくは存じ候へども右の仕事はみな山師的なることのみ多く到底最初より之を職業とは致し兼ね候。〔校本〕第十三卷、「書簡72」大正七年六月二十二日

賢治は土性調査の仕事は自分にとって「無駄な仕事」と述べ、また「みな山師的なること」と、関教授の指導の下で行われた土性調査を批判している。「ネネムの伝記」の次に書いた「ペンネンノルデ」が主人公となる改作の「項目六」に「大博士大に疑問をいだく／噴火係りの職を剥がれその火山灰の／土壤を耕す／部下みな従ふ」という設定がある。関豊太郎教授という人物は当時学校内では「氣むずかし屋のため校長以下他の教授達も遠慮がちであ」ったそうで、生徒にも厳しかったといふ。しかし皆に敬遠される中、「変人の関教授が目の中に入れ

ても痛くないと云う程賢治をかわいがつていた」⁽⁷⁷⁾

また賢治が土性調査の仕事を始める前に出した卒業論文（當時は「得業論文」という）の論文選定には関教授がついた。関教授に「ついた理由としては『先生につくものがないから僕がついた』と周囲にもらしたという」⁽⁷⁸⁾。このように、格別に親しかった賢治と関教授のはずであったが、賢治が関教授の率いる仕事を「山師的なること」と批判したことを考えると、余程土性調査の内容について納得のいかないものがあつたのであろう。父の政次郎にだけではなく、土性調査に抱く葛藤を保坂にも打ち明けている。

私は今学校の関さんの実験室へ入つて郡の土壤の分析をしてゐます。それは実にひどい失敗ばかりして居ます。（中略）私の様なばんやりはとても定量分析などの様な精密な仕事をする資格がありません。（中略）あゝけれどもこの実験室は盛岡の北の隅にあるのではない。諸仏諸菩薩の道場であります。私にとって忍辱の道場です。Blunder headよ。（うっかり者）放心者よ（後略）。〔校本〕第十三卷、「書簡74」大正七年六月二十日前後

賢治が仕事に関与している間は、関教授が身分を保証し、身分も給料も判任官待遇であつた。しかし分析試薬費や印刷費なども必要となり、結局この学年中は家から百数十円補助してもらふこととなり、父親にも厄介をかける⁽⁷⁹⁾。ちなみに、「ネネムの伝記」の主人公ネネムは大学校に入り、一日の授業を聞いてすぐ及第する。ネネムが大博士の推薦で就いた仕事は「世界裁

判長」という設定である。この設定は賢治が農林学校を卒業すると共に研究生として学校に残り、初めての仕事といえる土性調査の身分も給料も「判任官」待遇相当であったということと重なる。しかし賢治の土性調査の仕事は間もなく挫折し、実家から仕送りしてもらおう羽目になる。前述した保坂への書簡には、また賢治は長男として一家の長を務めなくてはいけないと意識しながらそれが出来ない後ろめたい心境も綴った。「私は自分で稼いだ御金でこの母親に伊勢詣りをさせたいと永い間思つてゐました（中略）けれども又私はかた意地な子供ですから何にでも逆らつてばかり居ます：それでですから不幸の事ですが私は妻を貰つて母を安心させ又母の苦勞を軽くすると云ふ事を致しません」。

賢治が土性調査に挫折する大正七年という年には、保坂が退学となる事件があつた。その理由と考えられる「アザリア」第五号の保坂による「社会と自分」には、「おれは皇帝だ。おれは神様だ。おい今だ、今だ、皇帝をくつがえすの時は、ナイヒルズム」といった反天皇の言論が綴られていた。保坂の退学は本人にすら通知されず、賢治は校内掲示板をみて知つた³⁰。いきなり退学処分になつた保坂に、賢治は沢山の書簡を送り、励まそうとした。その中には保坂の問題発言に言及した書簡もあつた。

ともかく私共は若くて絶えず新に層より層変て偶像を自分で壊しては進み創つて誤つたことに気付いた時に立派に焼き棄て勇ましく愉快に進ませう。（中略）あなたは一回只自

己のみ尊く宇宙の大を越へ三世十方に亘つて唯一の支配者である」と云ふ事を無理に感じ込みましたがそんなに不細工な建物は風化作用によつても三四ヶ月には壞れます（中略）春は来ましたがあなたは今ごろはやぶれかぶれで怒つてゐるでせう。私はまたあなたが静に笑ふとも考へる。私ならばさうした。退学も戦死もなんだ。みんな自分の中の現象ではないか（『校本』第十三巻、「書簡49」大正七年三月十四日前後）

「あなたは一回只自己のみ尊く宇宙の大を越へ三世十方に亘つて唯一の支配者」という言及は保坂の「おれは皇帝だ、おれは神様だ」という言葉に対する指摘に見えるが、「尊く宇宙の大を越へ三世十方に亘つて唯一の支配者」というのは、権力を増長するばかりで、最後は破滅する道に辿るネネムの人物像とも重なるものがある。ネネムの裁判振りは好評を得、「シヤアロ」といふばけもの高利貸でさへ、あゝ実にペンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ。ダニーさまの再来だ³¹。「実にペンネンネンネンネン・ネネム裁判長は超怪である。私はニイチヤの哲学が恐らくは裁判長から暗示を受けてゐるものであることを主張する」と周囲から讃えられ、「フウフイボウ博士のほかに、誰も決して喰べてならない藁のオムレツまで、ネネムは喰べることを許されてゐました」という文章からはネネムの地位の高さが窺われる。ネネムは嘗て自分の師であつたフウフイボウ博士と同じ、或いは博士を超えたといわんばかりの名声や地位を手に入れ、それを自負した。失脚する寸前にサンムトリ火山の噴火を鑑賞する際に我を忘れ、踊りながらこのよう

な歌も歌った。

いまではおれは勲章が百ダース／藁のオムレツももうたべあきた／おれの裁断には地殻も服する／サンムトリさへ西瓜のやうに割れたのだ〔校本〕第七巻)

我を忘れたネネムにはこの後、「どうしたはづみか、足が少し悪い方へそれました」と転落の結末が待っている。ネネムの失敗の理由は自分自身の存在を過大視した、或いはされたことにあるのである。かつて大学校でフウフキイボウ博士に教えられたように、「げけもの世界」は「げにも、かの天にありて濛々たる星雲、地にありてはあいまいたるげけ物律」という目に見えない自然の法則によって支えられてきたものである。げけもの世界は「なめくじでできてゐたころ」から、この「げけ物律」の下で「げけもの世界のヘンムンムンムン・ムムネ市の盛んなことは、今日と少しも変わりません。億百万のげけものどもは、通り過ぎ通りかゝり、行きあひ行き過ぎ、発生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行し、それはそれは、実にどうも見事なんです」と衰えることを知らなかった。自らの権力と力が世界至上のものだと信じ込んだネネムの行為は「げけ物律」と相反し、権力を奪われる始末となった。

六、おわりに

本稿では大正七年、賢治の童話創作の発端と見られる年に焦点を当て、同年に賢治の身辺に起きた主な事件、土性調査への

関与と保坂の退学事件を背景に「ネネムの伝記」に描かれた「げけもの世界」の原点を検証してきた。「げけもの世界」の荒唐無稽にみえるさまじな場面、空中で昆布を取るといった天地転倒と思わせる場面や水中動物のげけもの設定、そして最後に権力の増長で慢心を生じ失敗を招いた主人公、ネネムの描写など、この作品は同じ「伝記」と名付けられた「伝記群」の中では軽薄で、ナンセンスで、悲壮感の足らぬ早期作品として読まれてきた。

大正七年に農林学校を卒業した賢治は徴兵の問題もあり、研究生として学校に残り、関教授の土性調査の仕事を手伝うことになった。この仕事に当たる賢治の担当は朝から晩までひたすら岩手の山野を渡り歩き、地形や地質を記録することである。賢治の担当した部分は後に関教授の「巖手県稗貫地質及土性調査報告書」の第一章となる。その箇所は、「ネネムの伝記」の中に出てくる昆布取りの場面やげけもの世界が何故「なめくじでできてゐた」のかという疑問にヒントを与えるものだと考える。「げけもの世界」は逆さまになっているのか。それとも陸は海だったのか。海や陸、風や空、樹木の大自然の定義が曖昧である。この独特の世界観は地形や地質の研究に携わる者らしい描写とも言えよう。古生代に見える軟体類甲殻や魚類のげけものの登場、古生代の瑪瑙木の「世界長」、野原みたい広い教室や崖みたいな黒板など、何事も大きく描写される「げけもの世界」は、ナンセンスで言葉遊びに耽るような表現としてしか見られてこなかったが、実は地質時代の概念が強く反映されて

いた。

土性調査が研究室の実験に入った途端、賢治は慣れない仕事に疑問を感じるようになる。また関教授にもよく叱られたことや、仕事に抱いた葛藤や関教授へ対する不信任感から、半年でこの仕事をやめてしまった。そして同年に起きた親友、保坂の退学は賢治に大きな衝撃を与えた。「おれは皇帝だ、おれは神様」といった文章を書いた保坂のイメージは権力の増長で我を忘れ、失脚したネネムのイメージと重なるようにも見える。自己の原因で失敗を招く設定となる「ネネムの伝記」は「自己犠牲」がテーマとなる「伝記群」では異色の作品である。しかし卒業した年に遭遇した土性調査の挫折と親友の退学事件、また土性調査の後、就職の不安が続く中で、失脚に至るまでのネネムという人物の一生を描いた「ネネムの伝記」の誕生は若さゆえの空想物語ではない。自身と周囲の挫折や失敗とを重ねながら、自分の置かれている環境を具現化した作品と言えよう。

「伝記群」に位置づけられ、「自己犠牲」のテーマが描かれた「グスコンの伝記」も「ブドリの伝記」も、主人公は火山に爆弾を仕掛けるために火山に残り一人で死んでしまう設定となっている。こういう英雄式の死に方は「伝記」らしい結末をもたらしした。特に「グスコンの伝記」の「みんなはブドリのために喪章をつけた旗を軒ごとに立てました」という一文はこの話が「伝記」として後世に伝わっていくであろうことを想像させる。こういった英雄譚らしい結末となる「伝記群」中に「ネネムの伝記」を置いたとき、慢心で失脚した主人公が描かれた本作は

際立った作品である。「ネネムの伝記」の最後で、ネネムは出現罪を犯してしまい「何もかにもおしまいだ。ネネムは思わず泣いてしまう。そしてさつきまでぎらぎら光っていたクラレというお花も「風がどつと吹いて折れたクラレの花がプルプルとゆれました」。ネネムの失敗で終る最後は寂しいものである。読後に一抹の寂しさが漂うのは、賢治童話において珍しいものではない。「貝の火」から始まり、「どんぐりと山猫」での、再び山猫からの招待状が送られてこない一郎の寂しき、「黄いろのトマト」では、大人からひどい仕打ちを受け泣きながら家に帰る兄妹、「オツベルと象」では誤って河を越えて奴隷扱いされ、最後は救助されたにもかかわらず、寂しく笑った白象、「皮のトランク」での、廊下と梯子のない建物を設計してしまった斉藤平太などがそれである。このように、賢治童話には失敗で終わるパターン¹の定着が見られる。

※ 本稿の宮澤賢治の作品に関する本文引用及び年譜、校異などの引用は全て『校本 宮澤賢治全集』（筑摩書房、昭和四十八・五十二年）に拠るものである。引用に際しては「校本」巻号」と略記する。また傍線は断りがないかぎり全て論者が施したものである。

【注記】

1 「ネネムの伝記」のテーマ性について、天沢退二郎は「賢治童話の最初期、とまではいかなくても、かなりの初期作品というのはまちがいないであろう。一つには、全巻の「貝の火」「双子の星」にみた、慢心や誘惑

によって「墮ちる」という主題がここにも典型的にあらわれ」と指摘している。(『校本』第九卷「解説」)

2 天沢、前掲『校本』第九卷「解説」

3 「グスコンの伝記」の成立時期は確かめることができないが、「ブドリの伝記」とほぼ内容が同じ点から両作品の成立時期は近いと見なされる。

「ブドリの伝記」の原稿の成立時期について、昭和六年八月十八日、沢里武治宛の賢治の書簡(『校本』第十三卷、「書簡三七九」より)に(「前略」)それはこの頃「童話^{ママ}文学」といふクォーター版の雑誌から再三寄稿を乞ふて来たので既に二回出してあり、次は「風野又三郎」といふある谷川の岸の小学校を題材とした百枚(後略)とあり、この「既に二回だしてあ」というのは、「北守將軍と三人兄弟の医者」(昭和六年七月二十日発行の「児童文学」第一冊)と「ブドリの伝記」のことである。

書簡が昭和六年八月のものであり、また「ブドリの伝記」が「児童文学」に掲載される際に棟方志功の描いた四点の挿画(「昭和」六年九月)という日付が記されている点から「ブドリの伝記」の成立時期は昭和六年八月以前だと推測される。

4 古谷綱武「精神について」グスコ・ブドリの伝記」をめぐって』『近代作家研究叢書30 宮沢賢治の文学』(吉田精一監修、日本図書センター、昭和五十九年三月)

5 黒井千次「ブドリとネネム」(三木卓他編『群像 日本の作家12 宮澤賢治』小学館、平成二年一〇月)

6 押野武志「ネネム、グスコンブドリ、グスコブドリの」伝記」群』(『国文学』第四十一巻七月号、平成八年六月)

7 栗原敦「全集編纂の中で——賢治生誕一〇〇年によせて」(Library Ma

『』第十六号、平成八年七月)

8 「年譜」(『校本』第十四卷)には、宮澤賢治は大正七年に処女作の「蜘蛛となめくちと狸」と「双子の星」を家族の前で朗読したと記載されている。賢治の童話の創作の原点はここから始まるとされている。

9 関教授は賢治入学(大正四年)より主任教授として指導し、得業論文(卒業論文)を審査、稗貫郡土性、地性調査に助手として当らしめ、実験指導補助の身分を保証し、将来は助教教授に推す用意を持っていた。(年譜「校本」第十四巻、関教授についての解説より)

10 「アザリア」は賢治が盛岡高等農林学校第三学年の時に、仲間とともに創刊した文芸同人誌である。全六冊。盛岡高等農林アザリア会発行。

11 項目「土性調査」を参照(原予朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍、平成十一年七月)

12 黒井、前掲「ブドリとネネム」

13 押野、前掲「ネネム、グスコンブドリ、グスコブドリの」伝記」群」
14 「ネネムの伝記」では「なめくじできてゐたころの遺風」や「なめくじばけもの」のように、「なめくじ」についての表記が統一されていない。

原文を引用する際には原文のまままで表記するが、そのほかは「なめくじ」と表記する。

15 西川輝昭による項目「ナメクジウオ」(『日本大百科全書17』小学館、平成六年一月)

16 柳田国男「蝸牛考(四完)」(初出は昭和二年「人類学雑誌」第四十二巻七月号、昭和五十八年十二月『人類学雑誌』第四十二巻復刻)

17 関豊太郎教授の論文「巖手県稗貫地質及土性調査報告書」に助手の宮澤賢治が関与した部分について「序言」(大正十一年一月)には次のように

ある。

大正六年三月稗貴郡長葛博氏ヨリ公務ノ余暇ヲ以テ数年ヲ期シテ郡内ノ地質及土性ヲ調査シ農事改良ニ資セムトスルノ希望ヲ容レ、其年シガツ嘱托ヲ承ケ之ト同時ニ農學得業士神野幾馬及宮澤賢治ノ兩氏調査員トシテ嘱托セラレ著者ノ事業ヲ幫助スルコトトナレリ。宮沢氏ハ同年五月以降恰ク郡内山野ヲ跋涉シ、拮据勉強同年ノ終ニ至リテ地質図ヲ完成スルニ至レリ、著者ハ自己ノ踏査セル結果ニ照ラシ多少之ニ補修ヲ加ヘタリ、而シテ宮沢氏ノ觀察ト著者力実地ニ視察セル事実トニ基キ本郡地形及地質ニ関スル記事ヲ編成シ之ヲ報文ノ第一章トナセリ

18 項目「昆布」を参照（原予朗、前掲『新宮澤賢治語彙辞典』）

19 項目「タンイチ」を参照（原予朗、前掲『新宮澤賢治語彙辞典』）

20 この「中世代」は「中生代」の誤記であると思われる。

21 「山崩れ、雨炸」（『校本』第十三巻による訳文）

22 「拡散系（溶媒は空気 溶質は水）、すなわち霧のこと」（『校本』第十三巻による訳文）

23 「ネムの伝記」の次に試みられる改作は「太陽にできた黒い棘をとりに行ったよ」というフレーズから始まる「ペンネンノルデ」を主人公とする改作のメモ一枚や、数枚転用されなかつた断片、主人公が「ネム」という人物にする「ネムの伝記」などがある。その後、「ゲスコンの伝記」

を経て最後の「ブドリの伝記」にたどり着く。

24 『昔話にみる悪と欲望』新曜社、平成四年三月

25 ここで引用した「項目六」の内容は次項「七」へ移されることになる。

26 『校本』第十四巻、四六六―四六七頁

27 『校本』第十四巻、四六七頁

28 『校本』第十四巻、四九〇頁

29 このことについて賢治は申し訳なく思う旨を父親、宮澤政次郎宛てに書き送った（『校本』第十三巻、「書簡65」）

30 「学校を除名」という説明文を参照（『校本』第十四巻、四九〇頁）

31 「シャアロン」、「ダニノ様」とは、シエークスピア（一五六四―一六一六）の『ヴェニスの商人』に登場するユダヤ人の悪徳高利貸「シャイロック」と、「ダニエル様」のもじりである。ダニエルは旧約聖書中の法と神の尊厳を説く「ダニエル書」の主人公で著者とされる。『ヴェニスの商人』では第四幕第一場、法廷の裁判の場面で、裁判官ポーシャがいかなることがあっても法（この場合は証文）は曲げられない、とバサーニオに答えると、シャイロックは「名判官ダニエル様の再来だ」とポーシャをほめる。この場面は賢治がこれをもじったものである。（原予朗、前掲『新宮澤賢治語彙辞典』）

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年）